

ヨーロッパを歩く(27)
パリ最初の朝

相模 小西長之助



1987年11月23日(月)、朝5時40分ごろ目が覚める。同室のM氏はまだ眠っている。昨日昼過ぎローマからパリへやってきました。凱旋門やエッフェル塔、ノートルダム大聖堂、コンコルド広場など初めてのパリ名所を訪ね、夕方このホテル(ホテルのフランス語読み)「フランドール・パリ・リヨン」にチェックインした。

夜はモンマルトルにあるキャバレー「ムーラン・ルージュ」でフレンチカンカンなどを堪能し、夜中の0時40分ごろホテルへ帰ってきた。そのままだに荷物を整理してシャワーを浴びたあと、成田を飛び立つとき免税で買ったウィスキー「ジョニークロ」でパリ第1夜を祝して乾杯。眠りについたら夜中の1時半ごろだった。パリの朝を早く見たいという思いが強かったのか、4時間ほどの眠りで早く目が覚めた。外はまだ真つ暗だ。

窓を開けると、車の走る音や、すぐ隣にある国鉄リヨンからの騒音が飛び込んでくる。パリはもうすでに目覚めて活動している。80席くらいありそうなホテルの朝食専用食堂では、白人の団体客らしい40人くらいが賑やかに食事している。日本人や白人が数人しかいない奥のほうの席へ行く。

テーブルの上に、クロワッサンとプチパンが1個ずつ皿のついている。コーヒーとミルクの入った容器を左右の手に持ったウェーターが、コーヒーとミルクの割合を尋ねながら、カップに入れてくれる。パンもコーヒーもお代り自由だが、実に簡素な朝食だ。ヨーロッパ、特にフランス

タイの「京都」鉄道の旅
チェンマイ

千葉県支部 高垣むつ子



2015年3月に9日間、バンコクとチェンマイを旅しました。成田からソウルを経由してバンコクには夜9時過ぎに着。空港からバンコク市内へは、この時間ならまだエアポートレイルリンク(列車)のターミナルへ行って、そこからバスが走っていて、これの終点からスカイトレイン(BTS)という高架を走る地下鉄のよ

うな電車を利用してホテル近くまで行きますが、荷物が多いのと、この時間なら激しい渋滞はないと判断し、タクシーを利用した。それでも市内に入ると少し渋滞している。みんな寝るの？と聞きたいくらい夜中も活気に満ち溢れている街です。ベッドは横9センチ、縦2メートルで、とても狭い寝られました。13時間以上かかりますが、疲れ知らずでした。バンコクの駅から発車してすぐ、スタッフが人数分のオレンジジュースを持って来たので、ファーストクラスはサービスがいいねと話して少し飲んだのですが、口に合わず、もう1つは返してしまいました。

次の朝、同じジュースを持って来たのでことわって、コーヒートポルウォーターを飲んで、お金を出したら後でいいと言われたので、そのまま受け取りました。チェンマイ到着30分くらい前に請求書が来て確認するとコーヒートポルウォーターは125円、1枚をメイドさんへチップとしてベッド脇の台へ置き、部屋を出る。ロビーは、白人団体客でいっぱい返している。食堂で出会った人たちもきれいな市内観光をするには時間が過ぎるので、パリ郊外でも行くのだらう。

中申しない気持ちの方が優つて、言い値でお願いする。最初のワット・チェンマイルアンに着くと、10分戻って来てくれと言った。駐車出来ないらしい。この寺院の仏塔は地震で壊れてしまったが日本政府の援助で修復されたガイドブックにあった。テレビでも見たが、思ったよりかなり大きく、荘厳な感じがしました。ゆつくりする事ができず、再び走り出す。ワット・チェン・マンに到着。ここは、かつては宮殿でもあった。本堂の他にも、小さな寺院があった。2つの寺院(ワット)をかけた見学してホテルに戻り翌日のワット・プラ・タート・ドイ・ステープ観光の予約をした。チェンマイに来てここに行かなくて意味がないと言われていた。1人6000円だった。

あの夏の思い出
内藤セツコ

内藤セツコ



「先生、今日はどうでしょう。生まれまじり、女の児でか？」。あんな大きな泣き声がその部屋に響いた。私は、思わず担当の女医に抱きついて泣いた。有難うございますと言いつつ、涙が止まらなかった。予定の日より10日も遅れ、今日か、明日かと思いつつ、勤めが終るまで、毎日汗を拭きながら飛んできた。

その日は、自分の存在をみんなに知らせるかのように、そして先行きの不安を押しつけるかのように、特に大きな声で泣いているように思えた。8月13日の金曜日、なんとなんかに重さを感じたが、「大安よ」と事もなげに言う。姪は、3歳の時、年子の弟と共に、母親を亡くした、私のたった1人の姉である姪の母は、27歳で2人の幼子を残して腸のガンで死んだ。やせ細った姉を、時々見舞いながら、やさしい言葉もかけられなかった私。

「じゃあ、また来るね」と帰ろうとすると、「こども達を頼むね」と、涙が頬に流れていた。私は逃げないように部屋を出た。それが、姉との最後の別れだった。私は、自分が一人前になったら、姪たちを引き取りたいと思っていた。一緒に住む必要はなかった。一緒に住む必要はなかった。一緒に住む必要はなかった。

「こども達を頼むね」と、涙が頬に流れていた。私は逃げないように部屋を出た。それが、姉との最後の別れだった。私は、自分が一人前になったら、姪たちを引き取りたいと思っていた。一緒に住む必要はなかった。一緒に住む必要はなかった。一緒に住む必要はなかった。

ゆつくり朝食を取って、夕方からホテルの回りを散策。鉄橋があって、その下を川が流れていて、釣をしている人々もいる。ちょうど日の入りの時刻で、沈む太陽に今日一日

川熊長子 日本大学通信教育部校友会 監査 東京都支部 顧問 千葉県松戸市常盤平西窪町二一五 電話 〇四七三三八〇六二八

富澤良光 日本大学通信教育部校友会 監査 東京都支部顧問・会計 東京都足立区北加平町十八五 電話 〇三三六二九一八四六

森下憲次 日本大学通信教育部校友会 副幹事長 北海道札幌市北区あいの里 電話 〇一一七七八一七四九二

川田順一 日本大学通信教育部校友会 副幹事長 北海道札幌市清田区清田八条三丁目七三三 電話 〇一一八八四一五三三三

斎藤照夫 日本大学通信教育部校友会 副幹事長 埼玉県本庄市見玉町下浅見一八〇二二 電話 〇四九五七二二二〇一四

三上英子 日本大学通信教育部校友会 副幹事長 東京都杉並区高円寺南四一三四一〇 電話 〇三三三二二二二八

町まぢの文字 (29) 本報相模 小西長之助(香川県支部)

味噌 福島県津若松市内にある 味噌製造販売の店「満田屋」 日除けのれんは、北国の店

味噌 日除けのれんは、北国の店

味噌 日除けのれんは、北国の店

味噌 日除けのれんは、北国の店